

## 新時代の生産性運動を導く「羅針盤」足れ！

—全労生へ期待をこめて—

電機連合福祉共済センター 理事長  
(全労生 前副議長) 大福 真由美

全労生が 50 周年を迎える。副議長、調査部会長としていささかの関わりを持ってきたものとして、心からお祝いを申し上げる。昭和 30 年代の著しい復興の時代から、バブル崩壊を経た平成の低成長・成熟時代まで、この半世紀は大変な変転の流れであったろう。携わった先輩諸氏はじめ関係各位のこの国・社会・人への熱い想いがあつたればこそ、全労生としてしっかりと役割が果たせてきたものであり、共に喜び合いたいものである。

そうした評価の上に立って、ここでは、全労生の今日的に抱えもつプリミティブな課題について筆者なりに提起し、今後に向けた役割発揮への期待を述べてみたい。

それは、なんといつても全労生という組織のレーゾンデートル（存在意義・役割）を、改めて「知らしめる」という活動が必要だということである。なんとなれば、①連合などと渾然としてそのミッションが理解されていない、②労使ともに、生産性運動やその普遍的理念である「生産性 3 原則」への認知度・関心度が極めて低くなっている、という「そもそも」に関わる懸念される状況が散見されるからである。そうした背景に、非正社員といわれるパート・アルバイト、派遣、契約社員などがウエイトをまし(08 年 1760 万人・全雇用者の 34%)、しかも全体として組織化が遅々として進まず (08 年組織化率 18.1%)、そもそも労使関係が成立し得ないということや、「追いつき追い越せ」という目標が失われてしまったということがあることは否めない。

そこで、全労生としては、上述の課題や問題認識をクリアーするため、取り組む間口をもう一度精査し（的を絞るという意味で）、真に社会の規範となり労使が協力的に取り組めるようなテーマ（例えば、活力ある産業政策、企業の社会的責任や役割、新たな時代の労使関係、ワーク&ライフ・バランス、豊かさの再定義 etc）の研究や提言を一層極め、これからの成熟時代にふさわしい生産性運動を導く「羅針盤」足ればと期待するものである。そして、全労生の時代を見据えた取り組みにより、改めてその存在がしっかりと認知されんことを祈念し、半世紀からのスタートに心からのエールを送るものである。